

Leader's TOPICS

ちょっと気になる 地球寒冷化のうわさ

理事 自然環境部会長 エネルギー部会 吉田和史



最近の嬉しい話題はノーベル賞。数年前は青色 LED で3人の日本人科学者がノーベル物理学賞を受賞。昨年末には、リチウムイオン電池で吉野彰さんのノーベル化学賞受賞。LED 照明もリチウム電池（電気自動車や太陽光発電の蓄電素材）も共に地球温暖化対策に大きく貢献している。一方で、とても悲しい出来事があった。アフガニスタンの危機を救うために医療と灌漑工事を推進し大きな成果を上げ尊敬を得ていた医師・中村哲さんが殺害されたことである。中村哲さんは「温暖化と干ばつと戦乱」の恐ろしさを訴え続けていた。

さて、COP（国連気候変動枠組条約締約国会議）で世界各国が温暖化防止の対策を協議され、京都議定書（COP3）、パリ協定（COP21）が注目されてきた。最近のスペイン・マドリッド会議（COP25）では、少女グレタ・トゥーンベリさんが主役にも思えた。そのCOP25では、環境NGOの投票による「化石賞（温暖化対策に消極的、欧州の環境NGO中心で非公式な賞）」という不名誉な受賞があった。日本が石炭火力発電を推進していることが主な理由らしい。日本はすでに温暖化防止に100兆円規模の政策投資をしてきているので残念な評価とも思えるが、これは政治ショーと割り切るしかない。

北海道育ちで冬の極寒を経験した子ども時代に気候が少しずつ緩やかになる楽しみがあった。あれから約60年後のいま、温暖化防止を子ども達に伝えているのも不思議な感覚である。現在、「人為起源CO₂による温暖化主犯説」を前提として、CO₂排出削減は社会や我々の生活に大きく貢献してきた。化石燃料中心のエネルギーから自然エネルギーへの政策転換、節約・省エネ・3R等の生活改善、LED照明や電気自動車の普及など多く

の技術進歩の成果を生み出したのは凄いことである。

一方で、気になるのは一部で伝えられる地球寒冷化説である。水月湖（福井県）湖底の土壌調査での10万年の気候の変化、世界各地の海底の泥からの5億年の気候変化データ

からは、あたかも気候変動は太陽活動や地球の公転に深く連動して

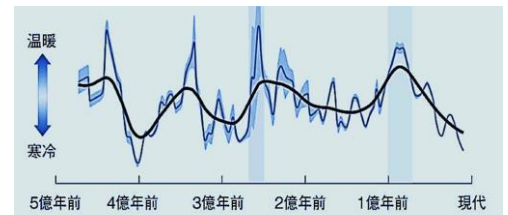


図1.4 世界各地の岩石に含まれる酸素の同位体比から復元した、過去5億年の気候変動

いるとの説

である。（「人類と気候の10万年史」中川毅著より）

最近では、イギリスの学会発表で2030年に太陽活動が今の60%になる確率は97%と発表され、米NASA航空宇宙局も認めたという話がある。地球はずっと氷河期（地球のどこかに氷河があるという意味、氷期と間氷期がある）であり、今は比較的温暖な間氷期とのこと。氷期になり寒冷化が進むと、植物を含めた生命活動が絶滅危機になる恐れもある、という。その氷期は2030年に始まるかも知れないという説である。奇しくもCO₂削減目標達成時期でもあるので皮肉である。

私自身は科学的な議論を展開できる専門知識を持たないので2030年の気候は勝手に想像するしかないが、IPCC（国連気候変動に関する政府間パネル）の主張「CO₂による温室効果が温暖化主因であり太陽活動等の影響は非常に小さい」というのは今でも腑に落ちてこない。そのような理由で寒冷化する地球を想像してみるのも一考と思う。